

支部報告

「レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の晚餐を3つの視点から読み解く」

関東支部

「鑑賞・評論の視点」、「創作・心理療法の視点」、
「色彩学の視点」

高松 智子

去る1月22日（土）年初め、支部行事として「レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の晚餐を3つの視点から読み解く」と題し、日本ペイント（株）東京事業所を会場に公開講演会が開催された。

日頃色彩に触れている我々にとって一番難解でありかつ関心の高い分野が、人と心の関係ではないだろうか？大学院でも社会の要請に応えるべく臨床心理学分野には非常に高い人気があるように聞いている。

折しも人間の心のドラマを描いたあの名絵画レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」が20年の修復をかけ甦ったのを機に、NHK制作ビデオ「レオナルド・ダ・ヴィンチの最後の晚餐 ニューヨークに行く」が放映され、続いて「ダ・ヴィンチ・コード」書籍も世界的ベストセラーとなったことで、益々ダ・ヴィンチ絵画の謎にスポットが当たったようである。

そこで、人間の心のドラマを描いた「最後の晚餐」を「鑑賞・評論の視点」からNHK制作ビデオの中で登場の新進気鋭の美術評論家アメリカ・アレナス女史の解説を受け、「創作・心理療法の視点」からは臨床心理士櫻井眞澄氏に、「色彩学の視点」からは文化女子大学名誉教授北畠耀氏に解説頂き、それぞれ3つの視点から謎に挑んでみた。

当日は予想を遥かに上回る140名からの参加者。会場では講演途中に補助椅子を出す程の盛況ぶりに、やはり関心の高さが伺えた。九州や神戸・大阪から参加の色彩学会会員や臨床心理学専攻の大学生や院生、看護婦、アメリカで専門に心理学を学んできた方等々幅広い分野からの参加者であった。

内容

■1. 櫻井先生による創作療法の概説。冒頭で心理学と臨床心理学のとの違いについて－「臨床心理学は

現象学的に実務に生かすこと。臨床現場に役立つ心理学ということに徹しケースの終結が1つの法則性をもつ立場に立ち、あくまでも役立つか役立たないかが重要である。」と強く言われたことがとても印象深い。

2. 色はパーソナリティとの関係が深い為、心理臨床によるクリエイティヴ・セラピー（創作療法）を特に色彩を主に解説。現場で用いているカラージュ創作時の16色＋白の17色の台紙の色を紹介。

3. 台紙に対する臨床色彩心理学的分析、ピースに対する臨床色彩心理学的分析、ピースの内容・切り方に対する深層心理学的分析、空間的配置に対する深層心理学的分析等を総合的に用いながら、投影分析的に理解をし、その内容をクライアントとのコミュニケーションに用いることによって、相互理解を深め、問題解決・症状の改善を図る療法であること。

4. 日常実践現場に於ける初期～終結の療法事例数点のご紹介でクライアントの終結時には台紙が青になることが多く、又宗教的なピースや馬のピースも貼られることが多い等、現場の生きた大変興味深い内容だった。

■NHK制作ビデオの「鑑賞・評論の視点」ではアメリカ・アレナス女史は実物大作品の再現により、高校生や街の人達と討論しながら人間の真実や心のドラマを表現し、人間を尺度に世界を理解しようとしたのである。

■ビデオ鑑賞後再び櫻井先生の「心理療法の視点」からは、1. 実物大作品再現によるアメリカの高校生達と検討の意味。2. 遠近法。3. ユダの巾着袋と「誰かが私を裏切るだろう」との言葉の関係。4. ダ・ヴィンチと他の画家達、ユダの位置の違いの意味などについて、江戸時代の狩野派の画家達が描いたふすま絵や日光東照宮の三猿の描かれた意味等を例に、あくまでも理論上より現場でどう役立つかで見ていく視点と作品を見る位置の問題や立場など、創作・心理療法の視点からの解説の一つ一つがなる

程と妙にうなずけ納得してしまった。

■北畠先生の「色彩学の視点」では「レオナルドの画面構成と色彩」「最後の晚餐を中心に」をテーマに、修復後の最後の晚餐のカラーコピーを含め沢山の本格的な資料と中でも貴重なスライドは見ごたえのある数々であった。

1. イタリア・ルネッサンス年表やレオナルド・ダ・ヴィンチの年譜の解説は、レオナルドの全体像が立体的に広く捕らえられている。
2. スライドでは特に当時のフレスコ画の手法とテンペラ画の手法の違いからレオナルドの絵画に迫り、壁画の保護上の問題での剥がれ落ちや湿気、ほこり、黄ばみを元に戻すために青を加えた混色原理によるくすみ等々、今迄の補修上での謎が次々とバールが剥がれていくように解説も続く。
3. 最後の晚餐がどういう描かれ方をしたのか？画面構成と色彩では、レオナルドは赤と青の反対色使いを意図的に試み、空気遠近法と明暗の対比を上手に取り入れている様や、天井のルネッタや壁面のタペストリーの花柄、見つかったフック、魚だったメインディッシュ、錫のパン容器等々今度の修復では細部までの考察がなされた。壁とタペストリーの線の関係や人の立つ位置より上にあるテーブルが斜上から見ているように描かれている事など、平面と立体の一体化の苦心もこの度伺い知る事となった。又当時の色彩は独立したものと考えられていなく、材料としてしか考えられていなかった。後19世紀の始め頃から独立した意味として色は色として意識的に、造形的に使われていったようである。

以上最後活発な質疑応答も含め40分も時間オーバーとなるなど、「とても内容の濃い価値ある講演会だった」、「非常に面白い企画だった」と参加者の方々は絶賛でした。

心とカラーとアートとの対話の場に参加して

財団法人日本色彩研究所 名取和幸

色彩心理という言葉は多くの人にとって非常に魅力的なものらしく、セミナーの受講者アンケートでも関心の高い分野の上位に位置することが多い。ただ、ここでいう色彩心理とは、感覚・認知の色彩心理よりは、パーソナリティ、感情、色彩療法や癒しなど、色と心との関係のことを指すようだ。その点から言っても、今年1月に開催された本講座は待望の企画といえるだろう。実際、多くの参加者に埋めつくされた会場がそのことを物語っていた。

本講座は、レオナルド・ダ・ヴィンチによる『最後の晚餐』を題材に、創作・心理療法の視点、美術評論の視点、色彩学の視点から読み解くという試みである。以下にそれぞれの概要と感想を記すが、私の専門の関係から心理系の話が多くなることはご了解いただきたい。

最初に、アート・メンタル・ラボを主宰されている臨床心理士の櫻井眞澄先生がにこやかに登場された。氏はカウンセリングの実践歴が長く、ご自身が手がけてこられたクリエイティブ・セラピーの中から、コラージュによるケースを多数紹介された（摂食障害の男女、うつ病休職者）。方法はざっと以下の通り。17色の台紙が用意され、いずれかの台紙上にクライアントはコラージュを製作する（聞き漏らしたのかもしれないが、クライアントにどのように教示されるのかを知りたいと思ったのは私だけではないだろう）。そして、ピースの内容、色、切り方、配置、台紙の色等を手がかりに、その人の心のありようを投影分析的に理解する。理解された内容は作者とのコミュニケーションに使われ、問題解決・症状改善が図られるというわけだ。

特に興味深く拝聴したのは、カウンセリング終結の段階には青い台紙が選択される比率が高くなること、こころの状態が好展開となるとときには馬のモチーフが現れることが多いことなどである。また、製作態度が受動的作業から、表現、創作へと移行することは、事例から見て取れた（そこで、氏はこの療法を従来までの芸術療法、表現療法ではなく、創作療法と呼んでおられると推測する）。また、「青空を悲しく感じる」心の状態は多くの人とは違うので、